ット ～a Girl is Hopeless, Yet She Keeps on Turning～

犬養るびい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ダブルラリアット　～ａ　Ｇｉｒｌ　ｉｓ　Ｈｏｐｅｌｅｓｓ，Ｙｅｔ　Ｓｈｅ　Ｋｅｅｐｓ　ｏｎ　Ｔｕｒｎｉｎｇ～

【Ｎコード】
Ｎ５９０５Ｓ

【作者名】
犬養るびい

【あらすじ】
ダブルラリアットの自己解釈です。――誰より大好きで、誰より練習しているのに、どうしても結果が出ない…そんな悩みを抱えている全ての人へ。この小説で、この曲で、少しでも前向きな気持ちになれますように。

プロローグ

いつのことだったかな。

だけど、今でもまだぼんやりと覚えてる。

私が初めて、バレエを知った日。

『すごーい！あのお姉ちゃんたちとってもキレイだね、留香（ルカ）ちゃん！』

『ほんとだね、未来（ミク）ちゃん！私、あのお姉ちゃん達みたいに回れるようになりたいなぁ！』

その後二人で、ママ達に「バレエがやりたい」って言うために、大急ぎで走っていったんだっけ。

私と未来のママは仲がいいから、二人で頑張るならと了解してくれた。

私たちは飛び上がって喜んだ。

私たちもあんな風に綺麗に回れる。

二人できっといつか仲良く、あの煌びやかな舞台の上で踊れる。

何も知らずに…私はあの時、そう思って疑わなかったんだ。

プロローグ（後書き）

こんにちは！！投稿者です。

ここでお知らせ。

これはボカロの小説ですが、ちょっとシリアスな感じを出すために、キャラ名にわざと漢字をつけます。

ルカ→留香
ミク→未来
リン→凛
ＭＥＩＫＯ→芽衣子
ＫＡＩＴＯ→海斗
ユキ→由希
ＧＵＭＩ→久魅

→ごめんなさい。

増えると思われます。

では、これからお楽しみ下さい（＾＾）

1.（前書き）

第一話ですぬ。
侍マンセー！！！！！

1.

私と未来がバレエ教室に通うことを決めた日。
ママに無理を言って、お世辞にも広いとは言えないリビングにスペースを開けて貰った。

大体…半径８５センチくらいの歪な形の円。
幼い私は、その円の中心に立ってもまだまだ余裕があった。

バレリーナさん達の真似がしたくて、でたらめな歌を歌いながらでたらめに両手を振り回して回った。
なんだかとっても幸せな気分だったらしくて、にこにこしながら回ってたんだよ――そう、ママが話してくれた。

これが、私の「ハジマリ」だった。

＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊

…いらいらいらいらいら。
焦りが抑えきれない私は、左の中指でコンコンと机を叩き始める。

なんせ先生の話が終わらない。
もういいじゃん。私は急いでるんだってば。

挙げ句の果てに貧乏揺すりを始めた私の肩に、隣の席から手が伸びてくる。

「留香、留香…気持ちは誠によく解るが、流石に行儀が悪いであろう」
「黙れ馬鹿なすび」

紹介がまだだったか。この鬱陶しい口調の馬鹿なすびは一応私の幼なじみ、神威だ。

そう、こいつも私と同じバレエ教室に通っている。
ああ言ってはいるが、こいつも私と同じ心境なのは間違いないらしい。

ふとドアの方を見ると、焦ったような顔の未来と目があった。
未来がアイコンタクトをしてくる。
（ねえ、まだなの？）
私は呆れ顔で返した。
（まだ。全ッ然終わんない）

1．（後書き）

ぐっだぐっだになっちゃったよー♪

こんばんわに。
エルナです（＾ｗ＾）↑

なんか後半普通に学パロみたいになっちゃいました…（＜＞）
これからバレエしますんで！！はい！！↑

それにしても、夜月さんから頂いたリクエストのがくぽが、こんなに重要なポストになるとは…。

一体誰が想像しただろうｋ（（ｒｙ

2．（前書き）

第二話～（＾Ｏ＾）／

ルカが可哀想なことになってます。

完璧なルカが好きな人は、見ない方がいいかも。

2.

「もおぉぉぉ！！全部あの担任のせいよ！！今年に入ってからこんな事ばっかりじゃない！！」

私、未来、神威はばたばたと走っていた。
先週も、その前の週もこうだった気がする。
急いでる時に限ってあの男は全くもう！

そうこうしているうちに、見慣れた小さな建物の前に辿り着いた。

――『咲音バレエアカデミー』――

私達3人は肩で息をしながら、少しの間分かれて急いで着替えを済ませ。
終わり次第また合流して、走って練習場へ向かう…それが、いつもの流れだ。

やっとの思いで練習場へ駆け込むと、みんなはもうバーレッスンを始めていた。
こちらに気が付いた芽衣子コーチは、やはり呆れ顔だ。
「何？あなた達は3人揃ってまた遅刻？」
「すみません…」
「話は後で聞くから、早く柔軟済ませちゃいなさい」

ここで、神威は私達とは別の向こうのフロアに移動することになる。
歯切れよい返事をして、いつもの場所へ走っていく神威の後ろ姿に向けられる熱のこもった眼差し。
そのすぐ後、明らかに私に向けられる冷たくてねちっこい視線。

これも、いつものことだ。

心配そうにこちらを見やる未来に、大丈夫だよって微笑んで、一番開けたスペースに腰を下ろし柔軟の体勢に入る。

だけどやっぱりこの状況に耐えきれなくて、柔軟後は逃げるように凛や久魅のいるバーへ移動した。

＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊

だんっ。
片足で床を思い切り蹴る。
くるくるくる、体で感じ取るリズムに合わせて回る感じが堪らなく楽しい。
でも、いくらも経たないうちに歪み出す体に覚える違和感。

「……きゃっ！！」

また失敗だ。

ああ…回っている間はあんなに楽しいのに。
回ってれば、嫌なことみんな忘れられるのに。
あのままで、いたかったなぁ…

そばで見てくれていた海斗コーチが、すぐに駆け寄ってきてくれる。
「…あっ、大丈夫？……うーん、おかしいな。留香ちゃん位の子なら、すぐに出来るはずなんだけど…」

…！！　今…っ

「はい…ごめんなさい」
困ったような、はにかんだような偽の表情。
この顔、うまく作れるようになるまで結構時間かかったんだよね。
…こんなの、上手くなりたくなかった。

「留香ちゃんが謝ることは無いよ。きっと練習すればすぐ出来るようになるさ、ね？」

私から離れた海斗コーチは、芽衣子コーチに思い切りひっぱたかれてた。

…海斗コーチに全く悪気がないことは、私だってよくよく解っている。
わかってる、けど…

私と同い年の子が簡単に出来ることを、私がすぐに出来るはずないじゃん。
私がその事を誰より良く解ってる…だから、だからどんなにか今ま

で練習してきたのかとか、そんな事全部、コーチは知らないから…
…！！！！

そんな思いを、噛み締めた唇でお腹の底に押し込める。
…ああ、最近こんな事ばっかり。

とりあえず、練習、しなきゃ。

だんっっ。

「……あっ！！」
「きゃああ！！」
「…久魅！！ごめんね、痛かったでしょ？怪我してない？」
「ううん、大丈夫だよ。私こそ邪魔なところにいてごめんね」

ううん、久魅。
ほんとに、ごめんね。
全部、私が悪いんだ。

周囲からは、くすくすと嫌な笑い声。

周りを見渡す。
未来も。

神威も。
さっきの事故から立ち直った久魅も。
私よりうんと小さな凛だって。
さっき私を嘲笑ったみんなだって。

みんなみんな、私より難しい技を次々に決めている。
すごく気持ち良さそうに回っている。

…仕方ないん、だ。
私には才能がないから。
みんなにできることが、私にはできないから。

「下手の横好き」は。
才能のない私は。
諦めるしか、ないんだ。

たとえどんなにバレエが好きでも、ね……

潤んでく視界。
みんなみんな認めたくなくて、私はまた回り始める。

私に近づくと、あぶないから。
離れてた方が…いいよ？

2．（後書き）

どうも、エルナです。

いや～…今回は、めちゃくちゃ思い入れの強い部分です。
興にまかせて書きました。
よって、なんかおかしい部分があると思われます。
ご指摘願います～ｆ^＿^；

3.

昨日から未来は家族旅行をしている。
レッスンはしばらく休むらしい。

未来には結構よくあることで、長期休暇には大抵旅行に行く。

それ以外にもこっそりレッスンを休んで、友達と遊びに行ったりしてるみたい。

私の家は未来ほどお金持ちじゃないので、旅行なんてめったにしない。
今までにレッスンを休んだのは、体調不良の時とおばあちゃんが大怪我したときくらいだと思う。

未来の凄いところは、それだけアバウトでもバレエ教室のトップにずっと立ち続けていることだ。

――私の方が……
私の方が、未来よりも…ううん、多分このバレエ教室の中で誰より熱心に練習してるはずなのに。そろそろこの努力、少しくらい報われてくれてもいいはずなのに――

…はっ。
いけない。またこんな事を考えてしまった。
私ったら、最近ダメだな。

未来が買ってきてくれるであろうお土産のことでも考えて、大人しく練習しなきゃ。

芽衣子コーチの心配そうな表情になんて気付くはずもなく、私はまた『空回り』始める。

努力する者はいつか必ず報われる。
……って暗示でもかけてなきゃ、やってらんないじゃない。

＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊

「留香！これからちょっと時間空いてる？」
レッスンが終わり帰りの準備をしていたら突然、芽衣子コーチに話しかけられた。

「…はい！大丈夫です」

その時は別に驚かなかった。
この教室の創立者・咲音芽衣子コーチは、練習時は厳しいものの、練習が終わればとてもフレンドリーだ。相談事だって親身になって聞いてくれるし、この教室で彼女を嫌っている人など絶対にいないと言っても過言では無いだろう。

もちろん、かくいう私もコーチのことが大好きだし、凄く尊敬している。
だから、こうやって私1人呼ばれたことはちょっと嬉しい。

コーチは練習場の壁に背を預け、座る。
私も遅れて彼女の隣に座った。

「…留香さぁ、最近バレエがあんまり楽しくなさそうだよね」
「…えっ？」

びっくりした。

「…どうして、分かったんですか？私、誰にも言ったことなかったのに」
「わかるよ。昔の留香は、最近のあんたみたいに貼り付けたような苦笑いはしなかった」
「！！」
「仕方ない事だとは思うけどね。子供みたいに、気に入らないことがあるたびに泣けばいいってものでもないし…何より、あんたなりに色々あるんだろうし、ね」

この人は。
どうして、ここまで私の事が分かるんだろう。

…素直になれれば良かったのに。
私は不器用過ぎた。
ふと口をついて出た、こんな言葉。

「……別に、はっきり私が下手だって言って貰っていいんですよ？」

「……そうだね」
「！！？」

「…ちょっと昔話していい？
あたしもね、通ってたバレエ教室の中で一番下手だったの」
「そう…だったんですか？」
「うん。みんなあたしを罵倒するの。下手くそ、踊りの質が下がるから教室から出ていけ、ってね。
あたし、悔しかった。大人も分かってくれなかったんだよねー。特に、分かったふりする奴とか、的外れな慰めしてくる奴とかにはめちゃくちゃ腹が立った。
今でもそうだよ？こないだの海斗の台詞、留香だって覚えてるよね？ぶん殴っておいたから、しばらくは心配いらないよ」

あぁ、それでこの間。

「で、ムカついて情けなくて悲しくて、必死で練習したの。
教室のみんなも大人も大嫌い、絶対上手くなって見返してやる、ってね。

勿論、嫌なことばっかりだったよ。

それでもここまで来られたのは、やっぱりバレエが好きだったからだと思う」

あぁ、私はなんて浅はかだったんだろう。
芽衣子コーチみたいな立派な人は、みんな最初から「勝ち組」だと思い込んでた。

「留香。
正直な話、あたしがあんた位の頃もそこまで下手じゃなかった」
「えっ！？！？」
「でも。
多分、努力とバレエが好きな気持ちは、あたしの何倍も持ってると思うんだ。
さっきあたし、あんたは変わってしまった…って言ったよね。
でも、技が成功した時とかの最高の笑顔は、何一つ変わっちゃいないよ。

大丈夫。
留香は、悪いようにはならないはずだよ」

「はい！！」

コーチはうん、と微笑んで、練習場から立ち上がりながら言った。
「さて…あんまり遅くなっても駄目だし、今日はお開きにしよっか。
次のレッスンには遅れずに来るのよ！」
＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊

コーチに別れを告げた後、私は凄くすっきりした気分だった。
広いとは言えない廊下をてくてく歩くうち、私はあるものを見つけた。

『次回の発表会の曲は“白鳥の湖”です。
配役は〇月〇日に発表されます』

私は一瞬、その場から動けなかった。

“白鳥の湖”…。

それは、私が初めてバレエを知ったきっかけの作品だったんだ。

――踊りたい。
あの時ひときわ美しく見えた、ヒロイン役の「オデット」の踊りを。

いや。
オデット役は未来が務めるに決まっている。
私なんかができるはずない……

でも、未来は今旅行中。
未来より先に、私が練習を始めれば……！！

少し、希望が見えた気がした。
興奮が収まらなくて、その日はスキップで家に帰った。

（ほう、白鳥の湖か！！我も今まで以上に練習に励まねばな！）
（私、今回は本気でヒロイン狙ってみようって思ってるんだ…）
（それはもしや、我と同じ舞台で踊りたいと言う意m）
（よし、三回死んでこい馬鹿なすび）

3．（後書き）

うーん…。

めーちゃんの格好良さが表現出来てるか、めちゃくちゃ不安です。

白鳥の湖のヒロインってオデットで良かったですよね、ねっ！？

4．（前書き）

結構久々になってしまいましたね…
がくぽ単体萌えの人ごめんなさぁぁぁぁぁい！！

4.

「留香…外はもう真っ暗だぞ。練習の続きは明日にしたらどうだ？」
「できなかったところ、復習してから帰る。
っていうか、私別にあんたに待ってて欲しいとか言ってないんだけど？」

レッスンの後の放課後練習は毎日の事だし、最近練習量が増えて疲れているけれど、今日は特に頑張らなきゃいけない。
なんせ、明日は未来が帰って来る日…未来にすぐ追い越されるのはわかっているから、少しでもリードしておきたい。

…練習の邪魔は、さっきから入口で待っているこいつだ。
気が散るからもう帰って欲しいんだけど。

「いや…やはり夜遅くに女一人を残して帰るというのは気が引けるからな」

「かっ…勝手にすれば！？」

折角だし我も練習するか、と呟いて、奴は羽織っていた上着を脱ぎ捨てた。

こいつ、私の話を聞いていたのか？

こいつ…神威は、どちらかと言えば顔はいい方だ。私の好みだという意味ではない。決して。
それに、未来に負けないくらいバレエが上手い…今だって、難しい技を完璧にこなしている。

別に、今ずっと見とれてた訳じゃないし、練習するの忘れてた訳じゃない。ない。絶対ない。

…良かった、バレてない。

…全く、こいつがいると本当に気が散る。

＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊

日が落ちて大分経ったようだ。薄暗い帰り道を二人、並んで歩く。
会話はない。

それにしても疲れた。ただ歩いているだけなのにまだ身体が回っている気がして、足元がやけにふらつく。

と。
急に身体の力が抜けた。
「…！？」
立ちくらみってやつかな？
私は急いで近くの壁に身を任せ、一呼吸ついた。

「留香！…どうした、具合が悪いのか？」
私の異変に気づいた神威が、慌てて走り寄って来る。
「ん、何でもない」
無表情でぴしゃりと答え、さっさと歩き出した。奴はまだ納得いかない様子。

「…留香」
「何よ」
答えた時、一瞬私は何が起きたのか分からなかった。

神威は私の正面にいた。
私の背丈にあわせて、腰をかがめている。
私の前髪を右手でかきあげている。
私の額に、自らの額を押し当てている…！？

「熱はないようだな…良かっ「ぎゃあぁぁぁ！！！！！ちょっ、あんたいきなり何すんのよぉぉぉぉ！！！！！
離れなさいよっっ！！！！！！！！」

。。。（Д）←がくぽ

す、すまん！急な事で怒ったなら謝る！！ごめんなさい！！すみませんでした！！　いや、ちょ、留香その冷凍マグロどこから出しぎゃあああぁぁぁぁあぁぁあああああぁぁぁぁ（（

4.（後書き）

クーデレ×ツンデレもいいですが、鈍感×ツンデレも可愛いものです

5．（前書き）

おっまたせー☆（（フザケンナヨ
こないだ嘘つきました。
今回は急遽、リア友と共同制作のプチ番外編となっています。
それではどうぞ～

5.

とうとう明日が、役割発表となった。
今までの努力の成果が、明日に解るのだ。
出来るだけ期待はしないようにしているけれど、それでも…
明日には、何か起こる気がしていた。

今日はレッスンがとても早く終わり、私・未来・凛・久魅は久しぶりに一緒に帰ることになった。

明日があるのでみんな緊張した顔だったけど、凛だけは何だか嬉しそうな表情。
何かあるのかな？

留「凛、今日は機嫌いいね。何かあるの？」
凛「うん！あのね、今日は憐(れん)が帰ってくる日なの！」
未「憐…くん？」
凛「そうだよーっ。久魅ねぇは会ったことあるよね？」
久「うん、凛ちゃんの双子の弟さんなんだよね。凛ちゃんとそっくりの可愛い子だよー。バイオリンが凄く上手で…確か、海外に留学中だったよね？」
凛「うん！今日、ドイツから帰って来るの。でね、明日あたしがいいポジション取れたら、近くのケーキ屋さんで特製オランジェット

奢らせるの！」
留未久「…」
憐くん…大丈夫なんだろうか。
心配になってきた。
久「そっかぁ…しばらく会ってないけど、憐くん元気にしてるかな？」
凛「…そぉだ！みんなこれからうちに来ない？」
未「えっ、そんないきなり…いいの？家の人とか、憐くんとか…」
凛「いいのいいの！ねぇ、そうしよ？絶対それがいいよ！」
こうなった後の凛は、もう誰にも止められない。
まぁ…凛にそっくりなバイオリニストも一度会ってみたい。
各々家族に連絡した後、私達は凛の家へ向かった。

―――――――――――――――

「すごい…」
凛の家を見ての、最初の印象がそれだった。
もの凄い豪邸…というか、これお屋敷じゃない？
オレンジと黄色の薔薇が咲き誇る広い庭…奥の方には小さな噴水まである。
未来の家もかなり凄いけど、凛…もしかして凄い人なのかも…

凛「きゃーーーー！！」
留未久「！？」
凛「れんーーーー！！おかえりーーーーー！！」
見ると、家（…お屋敷？）の前で男の子が手をふっているのに気が付いた。

留「久魅、あの子が憐くん？」
久「そうだよー。わぁ、しばらく見ない間に大きくなったなぁ♪」
憐「た、ただいま…凛。」
憐くん、凛に飛び付かれてた。
…首が締まってる気がするのは私だけよね？
久「ふたりとも、らぶらぶでいいねぇ～♪」
…いいの！？
まぁいいか。２人が幸せなら。
＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊
私達はしばらくの間凛と憐くんのらぶらぶっぷりを傍観した後、２人に家の中へ入れて貰った。
迷路のような沢山の部屋を次々と通り過ぎて、ようやく辿り着いたのは――
凛「ここが憐の部屋だよ～」

…

へ、何ここ。

ここを憐くん1人で使ってるの？

…うちのリビングの倍くらいある…だと…？

凄いのは広さだけではない。品のいいテーブルに見るからに柔らかそうなソファー…大きな木製クローゼットはピカピカに磨き上げられ、隣の硝子張りの棚には幾つもの賞状やトロフィーが綺麗にディスプレイされている。

いや、これ中学生1人の部屋ですか？

しかも憐くん今日まで留学でいなかったのに何故ここまで綺麗なのよ？

まさか…メイドさんか何かが…

凛「ねーねー憐、あれ弾いてよ！！“白鳥”！！」

久「いいねー！！」

未「聴きたいなー」

私が放心状態になっているうちに、テーブルには可愛らしいケーキと温かい紅茶が置かれていた。

凛なんかもう殆ど食べてしまって、となりの憐くんのぶんにまで手を伸ばしている。

憐「…よし、分かった。ちょっと準備して来るね」

憐くんが出て行ったのを確認した凛は、当たり前のように憐くんのケーキをほおばる。

凛「留香ねぇ、どーしたの？さっきから全然動いてないよ？」

留「いや…うん。なんかびっくりしちゃってさ。凛ってお金持ちなんだなぁと思って」

久「あ～！！うんうん、私も思ったー。凄いよね。後ケーキおいしいよ」

久魅…どこまでもいつも通りだ。

がちゃりと扉が開いて、バイオリンを持った憐くんが入ってきた。

凛お待たせ、と声をかけ、私達が座るソファーの近くに立つ。

憐「本当は“白鳥”はチェロの曲なんだけどね」

凛「憐の手にかかれば一発でバイオリンの曲に転調出来ちゃうんだからね！」

凛はウィンクしながらそう言うと、憐くんに早く早く、と演奏を促す。憐くんは苦笑いしながら、

「では、僭越ながら」

ぺこりと一礼して、バイオリンを構える。そしてすぅ、と柔らかく息を吸うと、滑らかにバイオリンを弾き出した。

「うわ…」

それは心臓に響くような低音。でもそれは冷たい音じゃ無くて、何だか心の芯から温まるみたいな――

私は目を閉じて白鳥が一羽、美しい夜の湖面を滑るようにして泳ぐのを思い浮かべた。

その低音に合わせて、私のちっぽけな悩みなんて溶けて消えていく。燐くんのバイオリンの音色にはそんな不思議な力が宿っているような気がした。

演奏が終わって目を開ける。私はじんわりと目に涙が溜まるのを感じていた。

未「…すごい、すごいよ燐くん！！当たり前だけど、すっごく綺麗な音色だった！」

久「久しぶりに聴いたけど…やっぱり燐くんは天才だよね！」

留「うん、こんなに綺麗なバイオリンの音聴いたことない！！あー、なんか明日が楽しみになってきた！」

なんだか、緊張も解けてきちゃったな。

やっぱり私、この曲が好きだ。

明日、どうなるかは分からないけど…この曲で楽しく踊ることができたらいいな。

素晴らしい演奏の余韻を噛み締めながら、私達はそれぞれの帰路についたのだった。

5．（後書き）

凛憐かわいいよ凛憐。

どうも、お久しぶりのエルナです。
作業用ＢＧＭに「鏡音レンの暴走」使ってました。どうでもいいです。

前書きにもあったように、このお話はバイオリニストなリア友の提案で出来ました。

憐の演奏中の描写を書いてくれたのが友人です（＊＾▽＾＊）
書き方が丁寧です。

彼女も、いつかはここで小説を書くそうです。
楽しみにしてるよ！
はやく来てね！↑

6．（前書き）

どうもです！！
今回はちゃんと役割発表だぜ☆
第６話どぞー（＾Ｏ＾）／

6.

思えば…それは、ほんのわずかな可能性でしかなかった。

それでもその消え入りそうな小さな光を手に入れるために、私は回り続けた。

自己満足で良かった。

空回りで良かった。

目が回り、軸もぶれてたけど。

それでも私は――あの舞台で踊りたかったから。

＊　＊　＊

みんなの緊張した顔。

張り詰めた空気が、レッスン場に重くのしかかる。

もちろん、私もその中のひとつだ。

芽衣子コーチはおもむろに口を開いた。

「じゃあ…次の発表会の役割発表を始めます」

私はごくりと唾を飲み込む。

期待しちゃいけない。

オデット姫の役は私なんかじゃなくて、未来に決まってるんだから。

心の片隅で神様にお祈りしている自分にそう言い聞かせていた。

「まず、最初…オデット姫役は、未来！」

何人かの感嘆と溜め息が漏れるなか、私は目の前が真っ暗になっていた。

やっぱり。

そうよ、やっぱり期待しちゃいけなかったのよ。

あはは…馬鹿よね、本当。私な訳ないのに…さ…

がくがくと震えて、今にも膝から崩れ落ちそうだったその時の私は一瞬、次にコーチが放った一言の意味が解らなかった。

「そして、オディール…黒鳥の役は、留香！」

周りのみんなが、一斉にどよめくのがわかる。

え？

え？

え？今何て？

オデット姫の次に重要で、難しくて…かっこいいポジション、オディール。

それが…私？
ルコちゃんの間違いじゃなくて？

だけど…コーチの確かな視線と、未来や神威の嬉しそうな顔が、その言葉を肯定している。

周りにばれないように、左手で太ももをつねってみる。

夢じゃ…ないの…？

次々と発表されるほかの子の役も、未だ止まないどよめきも、もう私の耳には入って来なかった。

ほんとのことなんだ。
オデット姫は駄目だったけど、こんなに素敵な役は今まで貰ったことがない。
美しい姫を悲劇に陥れる悪女…めちゃくちゃかっこいいじゃない！

役割発表はもう終わったようだ。

「留香ねぇ、すごい！かっこいい！」
「ずっと頑張ってたもんね。おめでとう！」
「いっしょに頑張ろうね、留香！」
「そなたの努力が報われたのだな！おめでとう！」

駆け寄ってきてくれた友達に、自然と笑顔がこぼれる。
久しぶりの明るく弾んだ声で、私は言った。
「ありがとう…うん、私がんばるよ！」

――――

「マジむかつく！オデットはわかるけど、なんでオディール役がアイツなわけ！？」
「ほんとだよぉ。あの役は梨々亜（りりあ）ちゃんの方がふさわしいに決まってるよねぇ」
「あんたもそう思うよね、美輝（みき）！アイツなんか、下手くそなくせにコーチに気に入られてるからって調子乗ってんだよ。
今に見てな…アイツがあのまま無事に発表会に出れると思わないでよ」

6．（後書き）

ピンクには白より黒のが合うと思います。↑
留香はオディールになりましたぁぁ！

そして…悪女Ｌｉｌｙ＆Ｍｉｋｉ登場です！！
さあ、これからみんなはどうなってしまうのか！？（（

7.（前書き）

れっつ☆現実逃避↑
ルカピーンチ！！です↑

7.

慣れない風景に少し緊張しながら、広い舞台へと一歩、二歩、踏み出す。
最初の方は全然できなかったステップも、今はかなり上達した。
曲の流れに合わせ、舞台中央の王子様――もとい神威のもとへ。
軽くアイコンタクトをとって、次は何度も何度も繰り返し練習した場面だ。…少し転びそうになったけど、ここもなんとかクリア。
最後は私が一番気を使ったところ…姫のふりをした悪魔の娘（黒鳥）は、王子に接近――抱き合うようなポーズの最中、私は顔を観客席へ向けて意地悪そうに片方の口角を釣り上げた。
悪女オディールを出来るだけそれらしく演じようと、必死で考えた結果だ。

ぱんっ、
芽衣子コーチが手を打つのが聞こえる。
ポーズを崩してステージから降りると、コーチ2人の嬉しそうな顔がよく見えた。
「留香、良かったわ！今までで一番よ。上達してるわね！」
「2人で踊るところもほとんど完璧だね。やっぱり幼なじみだから

息が合うのかな？」

息…合ってた、のかな？
なぜか得意気にそんなものですと答える神威に、容赦なく蹴りを入れる。
腰にヒットした。

こんな私達のやりとりが可笑しかったのか、コーチは声をあげて笑い始めた。

いつの間にか復活した神威も笑った。
つられて私も笑った。

私は幸せだった。
だから――

舞台袖から覗く、怖いほどの嫉妬の視線になんか、気付くはずもなくて。

＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊

それぞれの衣装が入った大きな鞄を抱え、私と未来、神威は談笑しながら長い階段を下っていた。

「それにしても、留香の黒鳥かっこよかったね！神威くんとのラストの所なんか、私鳥肌立っちゃった！」

少し興奮気味に話す未来に、私は喜びを隠し切れなかった。

そう、今日は初めての舞台練習。
最初は失敗ばかりで毎日半泣きだったけど、みんなに支えられてやっとここまで出来るようになったんだ。

自分で言うのもなんだけど、今日の舞台練習は大成功…得意になっていなかったと言えば嘘になる。

「ありがとね、未来。私がここまで来れたのも未来のおかげよ」
「我は？」
「あんたは黙ってなさい」
「（、・ω・、）」

まあ、神威も私の練習に無理やりつきあわせたりしてるけど、こいつには絶対お礼なんか言ってやらない。

でも…発表会が無事に終わったら、お菓子くらい焼いてあげてもいいかな。

歩いているうちに、左足の靴に違和感を覚える。

「あっ、靴紐…　2人とも先に行ってて」

踊場に屈み込んで、ほどけた靴紐を結び直す。

立ち上がると、窓から見えるオレンジに染まった街。
あの日…初めて見たバレエ発表会の帰り道もこんなだった気がする。

あの日の私は、今の私を見て褒めてくれるかな？
すごいね、きれいだねって、笑ってくれるかな？

考えている間に、未来と神威はすっかり先に行ってしまったみたい
…早く追いかけなきゃ。

階段を降りようと体の向きを戻す。
一歩踏み出し、

刹那。
――ドンッ――

「っ！？」
訳が解らなかった。
気が付いたら私の体はどんどん前のめりになって、あり得ない速さで地面が近付いて――

練習でぼろぼろになっていた左足首に激痛が走った。
「――～ッッ！！！！」
痛みで声も出ず階段下にうずくまる私は、確かに聞いた。

「あはははは！！上手くいったねぇ！！」
「ざまぁみろっての！ちょっと誉められたからって調子に乗るから！あ～あ、ぶざま～！！」
「アイツ、これでもう踊れないよぉ。黒鳥役は交代だよねぇ」
「当たり前じゃん！神威サマの隣は、単なる幼なじみのアイツよりアタシの方がふさわしいに決まってんだから！」

美希に…梨々亜！！！！
あいつら、私を嫌ってるのは分かってたけど、まさかこんな…酷すぎる！！

「あ、やばいかもぉ。人が来るよぉ」
「分かった。――自分の実力で準ヒロインになれたと思ってんのか知らないけどね、アンタなんかコーチに色目使ってお情けで舞台に

立たせて貰ってるだけだし！未来ちゃんや神威サマだって、いい加減アンタの世話に嫌気さしてんのよ！　――行くよ！！」

…動けなかった。

痛みの所為じゃない。梨々亜の言葉が、頭の中でぐるぐる回り、言葉が出なかった。

私は…　今の私の幸せは、本当にこの手でつかんだもの？
信じてた未来に神威、それからずっと一緒にいた友達…　みんなは、本当は私のこと、どう思っている？

ずっと頭の片隅にあったけれど、考えないようにしてきた。
それは、私が現実から逃げていたから？

引っ掻き回された脳内に、不安と焦燥感が黒く重く広がってゆく。

私を呼ぶ未来と神威の声だけが、遠く耳に響いていた。

7.（後書き）

大変なことになっちまいやしたねぇ…↑

とりあえず、読了ありがとうございましたm（＿＿）m

次回にご期待…

…

…できないか。うん。

8．（前書き）

気がついたら、前の投稿が半年前…！？

時がたつのは早いですｎ（（ｒｙ

遅くなってすみませんｍ（＿＿）ｍ

8.

左足の傷は、思ったより酷かったらしい。
あのあとに担ぎ込まれた病院で私は医師にこう言い渡された。

『少なくとも1ヶ月の間、安静にしておくこと』――

発表会はちょうど1ヶ月後。
目の前が暗くなった気がした。

＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊♪＊

次の日、私は松葉杖をついて学校へ行った。
心の中とは正反対の、澄み渡って雲一つない青空…泣き出したくなる。

昨日の病院帰りにコーチから言われた言葉を思い出して、またどうしようもない悲しさに襲われた。

『留香ちゃん、残念だけど黒鳥の役は交代だ。
君は頑張っていたし、悔しいのも分かる。でもこればかりは仕方ないんだよ。
また次の機会を目標に頑張ればいいよ』

コーチの言葉は正しい。本当に、役は交代するよりほかないのだか

ら。

だけど、
だけどね、コーチ。
私の怪我は、仕方無くなんかないんです。
私は今までの努力も苦労も全部、あの子のせいで無駄にされたんです。

言おうと思えば言える筈だった。
でも、証拠は？
あのとき梨々亜が私を突き落とした証拠なんて、ある訳がない。
それに何より。

――『あんたなんか、コーチに色目使ってお情けで役貰ってるだけ』――

あの言葉が、自然に私の口を閉ざしていたんだ。

昨日の話を一緒に聞いていた未来と神威の気遣いや、たまに見せる哀れみの視線も、その時の私には辛いだけだった。

私は未来にも、本当のことを言い出せずにいた。
未来にまで迷惑をかける訳にはいかないし…

――『未来や神威だって、いい加減私の世話焼きにうんざりしてるはず』――

まだ耳にしつこく残っていたから。

要するに、怖かったんだ、私は。
近くにいてくれると信じていた人たちが、急に遠くへ行ってしまった気がして。

「おはよー！！やだ、留香ちゃん松葉杖なんかついちゃってるんだ！かわいそー」
「コーチから聞いたよぉ。怪我しちゃったんだってねぇ！　頑張ってたのに、ほんとに残念ねぇ～」

ふと顔を上げれば、嫌味たらしく声を張り上げる2人の姿
…一番会いたくないやつらに会ってしまった。
自分達でここまでやっておいて、何が「かわいそー」だ、馬鹿馬鹿しい…

「あ、それからさぁ、発表会の黒鳥の役は、留香ちゃんの代わりに梨々亜ちゃんがやることになったからぁ～」

……え？

「あたし、留香ちゃんの分まで頑張るよ！じゃあね～」

私の変わりの黒鳥役は、
梨々亜…？
こんなことって。

去り際に聞こえた「バーカ」の声とともに、私はただそこに立ち尽くしていた。

8．（後書き）

梨々亜と美希うざっ！！

ちなみにこいつらの性格の汚さは、うp主の身近にいる嫌いな人がモデルになってます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5905s/

ダブルラリアット ～a Girl is Hopeless, Yet She Keeps on Turning～

2011年10月10日11時22分発行